

書評

松村真司 著

プライマリ 地域へむかう医師のために

兵庫民医連家庭医療学センター代表

森 敬 良

「ここに答があった！」これがこの本を手にとってみての率直な感想であった。

若手家庭医部会の仕事をしていると研修医からさまざまな相談を受ける。「いい家庭医・総合医になるには?」、「どこまでを診療範囲とするのか?」「専門医などの資格は取らなくていいのか?」、「家庭医は都会には向かないのでは?」などなど、回答に窮することも多い。しかし、この本をひもとくことで、これらに対する答えが明確になっていった。

著者の松村医師は、東京都世田谷区にある松村医院の若き院長である。この本は見学に来た研修医

との対話が狂言回しとなっている。松村医院、松村家の日常風景も交えながら、その対話に前述の疑問に対する回答や、著者の実体験などが語られていく。

著者が一人でプライマリを実践するなかで、どのように人・地域をみているか、いかに EBM や振り返りを行って生涯学習を進めているか、「自分を保ち続けるために」必要なことは何か、などテーマが進んでいく。それらの言葉は、著者の血であり肉であり、いずれも実践に基づき説得力がある。この本に出会ったことで自分の課題も見つかり、非常に勇気づけられた。

最後に悩める研修医に著者がエールを送っている。「自分自身の足で立ち、自分の頭で考える」のだと。この台詞は読み進めていて、実に温かみを感じた。

「総合診療」「家庭医療」「プライマリ・ケア」を目指すすべての若手医師、研修医にぜひお薦めしたい。大いなる共感をもって読破し、同時に希望と安心感を得ることができるであろう。また、読みやすい文章であるので、これらをもっとよく知りたい医学生やコメディカルの方々にもお薦めの一冊である。私はこの本を研修指導、職場での学習会に活用していくつもりである。また、この本の大きなメッセージの1つでもある「続けること。そして、続けるためには熱意をどこかに持っておくこと」を心にとめて、毎日の診療を行っていききたい。

〔A5 頁208 2008 年 定価
2,310 円(本体 2,200 円+税 5
%) 医学書院刊〕